『わたしを連れて』

「いつまでも、松は〜宮城県松島市〜」

真木　あすか

真っ白な地図

東北へはほとんど行ったことが無かった。

「ほとんど」というのは、どうやら親によるとわたしがまだ幼稚園の頃に、秋田や仙台へは連れて行ったことがあるらしいのだが、残念ながらその頃の記憶は欠片ほどしか残っていない（般若再び）。

その欠片の中身も、一緒に行った祖母が石に躓いて転び、旅行初日から片腕宙吊り状態になってしまったことや、わたしが車酔いでどえらいことになり、車内をどえらいことにしてしまったことなどなど……。

旅の思い出には違いないのだが、東北の地ではなく、一緒に行った家族の苦笑いを思い出すばかりで、旅の情緒というやつはまるでない。

その、片腕宙吊り姿が孫の旅の記憶となってしまっている祖母は、そんな骨の一本や二本ぐらいではへこたれないほどの旅好きだ。昔はよく、休みの日に母とわたしと妹を日帰りバスツアーに連れて行ってくれた。

しかし、車のあの独特の臭いと揺れが猛烈に苦手だった私は、バスツアーが大の苦手だった。

今では、そこまで車酔いをすることは無くなったが、いざ車移動となるとバスツアーの悪夢が甦り、少し気が重たくなる。

そんな私が深夜バスで東北へ行こうと思い立つのだから、人生何がどう変わるかなんてわからない。

二〇一二年二月

あるバンドのライブを見に行くため、友人と仙台へ行くことになった。

そのバンドは東北でしか見られないというわけではなかったし、むしろ、関西でもよく